

生 真

第 五 卷 第 五 號

□ オウ、私の懐かしい天地のミオヤよ、我は心からアナタの御力と御恵とを感謝せずには居られませぬ。今や私の一生は寸時もアナタを離れては生きて行かれぬことを知りました。

□ 私がかうして今日の一日をやすらかに嬉しく楽しく働くことのできますのも、偏に之皆アナタの御力と御恵みとによるからであります。今や私の一生はアナタを離れては生きる事ができなくなりました。

□ 凡そ世に弱いものといふならば、恐くは私ほど弱いものとはありますまい。何となれば寸時も私はアナタを離れては生きることができないほど弱いです。

□ 乍然若しも世に強いものがあると云ふならばそれも亦私は強いのはないかも知れません。何となればアナタと一なる私の心は凡そ如何なるものにも真に恐るゝものがないからであります。

□ さればミオヤよ、凡そ世に私ほど弱くして又強きものとはありますまい。弱きが故にミオヤにすがり、強きが故に一切を恐れず、これみなアナタの上なき私への賜であります。

□ オウミオヤよ、何と云ふアナタの世界は宏大にして又無遍なる莊嚴の世界であります。



目次

- ◇ 宿命を破りて 尅子
- ◇ 道德思想の變遷 土屋觀道
- ◇ 愚感(一) 一
- ◇ 憶念の記 佐藤忠義
- ◇ 王様と其の子供 眞野志岐雄
- ◇ 吾朋便り



△四月八日はお釋迦がルンビニの花園に、王侯の子として誕生せられた芽出度い日です。而し本當に道を求め初めてから或は山に入り、山を出で、終に菩提樹下に端座思惟せられた、そして自分が何處から生れて來たのか、又何故生れて來たのか、何處へ行くのかと、自分の世に産み出された意義を解かうとせられた、爰に釋尊の第二の誕生が明けそめた。

△生んで貰つた者が、生んで呉れた者を思議するとは本當に怖ろしい事です、世にこれ程深嚴にして偉大なる事はありません。

△釋尊はこれを考へて究めやうとせられた。而し考へる己前に考へさせてゐる自分が既に在つた事を思ひ、その自分のあつた事は又考へて解つて來た事を思ふと、自索と自己と、どちらが先か解らなくなつて來た。而かも思惟と自我とか嚴然遊戲的に佛を假想してゐるのでなく本當に信せずには居られなくなつて來た。

△「天上天下唯我獨尊」の産聲は、佛を見出した時の此佛の聲である、そして其聲が十方の世界を破つて、十方の世界に植付かつた、そして今や億々の衆生が第二第三の釋尊として、又此聲を擧げつゝある、釋尊の誕生は三千年前の史實で無く、現在の事實である。私の裡に於ける此事實である。(尅子)

宿命を破りて

□ 數ある兄弟の中でも、兄が死んだり、妹が死んだり、自分のやうな病身者が一番早いと思つてゐるのに一番遅くまで殘されてゐたり。一生懸命に勤めてゐる内は勤めさして置いた、さあ一家を持つといふ間際になつてばかり殺して見たり、我々人生の蔭には何か黒坊が一人立てゐて我々を好きにやうに操つてゐるやうに思へてならぬ。

□ もう成功するといふ處まで行つて、がらりと大失敗したり。怠けてゐる者にどんぞんと幸運を向けてやつたり。實に惡戯三昧をやつてゐる大惡魔と云つてよいか、佛様と云つてよいか、何か不思議者がゐるやうに考へてゐるならぬ。

□ 其者が絶對の不可思議力を持つて、我々を自由自在に手玉にとつてゐる、時には憤慨に堪へぬが、悲しい事には我々には見えぬ、力がない、だから弄られる儘に泣寝入りになつてゐるより仕方が無い、仕方が無いばかりか却てあべつかを使つて御氣兼を取り、幸運を向けて貰ふやうに頼まねばならぬとは實になさけ無い次第である。

□ 人間には自由意志がある、自ら運命を開拓し、創造してゆく力があると云つても、一歩先きが解らぬから創造したと思つて慰めてゐるだけで、實は創造でも何でも無く、既定通りやらされてゐるのであり、或は陰坊主の云ひなりに曳き廻されてゐるのかも知れぬ、否や實際黒坊主に酷き使はれてゐるのである。

□ 斯う思ふと本當に佛が——神が呪はしくなる、佛ぢやない神ぢやない自分の「業」か知らんが、その「業」がにくくなる。最早や一歩も其の宿命、軌範、規矩から出れぬのか知らん。

□ そうぢや無い。

□ 佛とは私が次の運命を造るが爲めの力となつて下さる内勇者である、業とは次の自己へ進むが爲めに私が宿してゐる隋力である。一つものは二つと無い二度と無い、一本の道をも其通り渡つてゆくといふ事は出來ぬ、渡れば其れは二本目の道になつてゐる。(尅子)

道德思想の變遷

土 屋 觀 道

一、自分と社會

自分が社會を離れて存在しないやうに、社會も亦自分を離れて存在するものではない。乍然自分と社會と其の何れを中心として生活するかと云ふならば、恐くは十中の八九まで殆ど自分中心の人ばかりであらう。從て一般に道德と云へば自分を犠牲にして社會の爲めに盡すのが道德のやうに思つてゐる人が多いけれども、其の實これが内容を靜に點檢し來る時、凡そ世間の道德は其の中の十中八九は之また自分中心より割出された所の道德が多いことを發見するであらう。而も其の事は今日の私共の生活に於てばかりでなく、之を古代の原始人の生活に徴するも亦このことを發見する。從て彼の生物の生存競争や弱肉強食の如きそれが主として、排他的自分中心から來てゐることは勿論であるが、所謂相互扶助とか、相愛關係の生活の如きすら、之を嚴密に反省するならば、恐く之も亦自分中心の利己主義の變形から來たものでないと誰が云ひ得やう。多くの場合人類の生活に於て、凡そ善惡の觀念が何所より發生して來るか云ふならば、いつでも自分の氣に入つたものに對して善意を感じ、自己に氣に入らぬものに對して惡感を感じるは人間自然の姿であらう。從つて、吾人に起り來る善惡の觀念は主として之が善惡の標準を定めやうとするのである。

然ば已に其の善惡の標準と云ふものまでが自己の利害を中心として之を定めやうとするならば、同じ道德と云ふものも其の見人の立場の相違によつて其の道德の標準が自分中心となつて來なければならぬ。而も此の事實は已歴史の事實が示してゐるのであるが、其の中でも權力の弱きもの、主張は權力の強きものに壓迫せられて消滅の形となり、たゞ力強きもの、主張のみが社會道德の基準かに見えてゐるのである。故にかゝる意味での道德は、つまる所力強きもの、主張が力弱きものへの壓迫となつて其の道德も亦やはり強いられた所の道德となり、力弱きもの、力強きものへの盡すべき義務のみの道德となるのである。

之を史上に徴すれば封建時代の道德がこれである。諸侯が其の配下に對する態度は全く專政横暴の極をつくし、生命財産の與奪も全く其の人の自由であつた。而て其の臣民の權利は寸毫も主張せられず、たま／＼自分に有してゐるものは上長につくすべき服從の義務のみであつた。

然に社會の組織が經濟事情の變動と共に移動して封建の制度倒れて此の世が金錢萬能の時代なれば之に伴ふ社會の道德も亦自ら變化して來たのである。それは偏に産業革命以來、諸侯の經濟思ふに任せず、武士の階級も金錢にこと缺いで町人の金權に頭が上がらぬ有様となり、社會の表面はともかくも内面社會の生活は全く封建制度では立行がなくなつて來たのである。從つてこゝに民權の伸張は自ら金錢本位の個人主義となり、人の爲めを計らうよりも先づ自己の安定を計らうとするの傾向は諸侯の力のゆるむと反對に強く主張せられて來たのである。いはば民權の主張は主として封建時代に壓迫せられていた方面に對する反動思想として、人民の生存權及び個人の自由、平等を以つて正義となすの思潮である。從

つてそれが又一つの道德の要目となつて來たのも當然のこと、云はねばなるまい。

然に此の主張たる主として封建制度の壓迫に對する民心の反動思想であつたのがいつしか此の思潮を利用して其の私欲を逞しくしたのが資本家階級の横暴であつた。即ち人民の自由並に生存の保證は當然のこと乍ら、之を利用して契約の自由となり、貧民の労働者を使役して經濟の獨占權を握つたものが所謂資本家階級である。然乍ら機械文明の發達は自ら此の産業上の經濟革命を來し、資本制度の社會組織は益々貧富の懸隔を大ならしめ、延ては今日の生活難を愈々大ならしむるものがある。而も一方社會國家の中樞は之等の資本家に占領せられ、あらゆる國家の立法行政も主としてそれらの獨占に歸した有様であり、人民の生存と自由とは全く之等の資本家專横によつて奪はれて來たのである。

茲に於て、一方有識の士は自己の自由と生存の爲めに之等の組織を改變し人類の自由向上の爲めに更に平等の權利を主張するに至つたのであつた。之が所謂個人主義的資本家專横の惡政を改革しやうとする社會主義的自由平等の叫びである。從て今日の社會主義が主として民權の自由を主張して普選の正義を主張し、立法と行政とを資本主義制度より取り返して、人民一般の立法と行政にしやうとして來たのである。而も今日の社會主義がともすれば主として資本家を敵對にしてゐるのを以つて、資本家側からは自己の生命と自由とを束縛せられるの感もするのであるが、それは恰も封建制度のものに上位の階級に立つてゐる無力の諸侯と同じやうなものであらうと思ふ。

然乍ら眞實の意味に於ける個人の自由と生存は今少しく全人類の幸福を中心とした社會主義的道德思想の上に上下一致の直實の平和があらねばなるまい。今や國家も之を考へ、社會一般も此のことを考へて

來た。それが今日の眞の道德の思想である。(一五、五、六)

偶 感 一、二、

一、大乘佛説

昔から佛典研究者の多くの人が大乘經典を佛説でないと言ふ人があり、又小乘經典こそ佛説でないと言ふ人がある。然ども佛説とか非佛説とかは何を標準として云ふのであらう。若し大乘經典を以つ釋尊の説かれた言葉でないから佛説でないとするならば恐くは小乘經典といへども決して釋尊直説ではない。

加之經典成立の年代から云つても大乘經典必ずしも小乘經典よりも新しいものばかりとも云へず、又小乘經典云はれるものの中にも已に大乘的精神の大に見るべきものがある以上、單に經典としての大乗小乘の區別があるべきかは疑問である。

たゞこゝに佛教發展の史實に徴すれば小乘經典と云はれるものが比較的大乘經典といはれるものよりも前に出來た位いのものであつて釋尊の實行を人間的に伺はれるの感があり、大乘經典と云はれるものが其の割に後代にできたものであつて、少しく釋尊の史實を遠ざかつた感がする、けれども其の實は釋尊の理想そのものを語つたものである。從て此ことは已に我東洋の佛學者の間にもかうした疑問を起した人もあり、又今日の西洋の人々殊に南方佛教の研究者には此の方面の疑問の人が多いのである。乍然それは大なる誤りといはねばならぬ。何となれば嚴密な意味に於て本來大乘經典小乘經の區別はない。乍然た後人の説に於て大乘教、小乘教の區別はあるが、自ら小乘教徒と云ふものはない。故に小乘教とし

ては有説無人と云ふ可きである。

二、釋尊自身を見よ

世の人が佛教を誤つて隱遁的佛教となし、或は又佛教を非社會的非活動的なもの、如くに視、この世を非觀的に説くものかのやうに思つてゐる人があるけれども、之は大いなる間違ひである。それは何よりも解脱後の釋尊を見るがよい。太子の位を捨て兩親妻子を捨て、山に入つた當時の釋尊は確に厭世の人であつた、そして又非社會的非活動的人であつた、乍然解脱の釋尊、山を出でたる佛としての釋尊は入山當時の釋尊とは全く異つた釋尊である。朝夕寸毫も道と離れぬ釋尊の生活は正にこれ大乘の精神であり、活動の佛である。そこには少しの悲觀もなく又單なる隱遁の人でも無かつた。悲樂を超える超人勇獅の獅子孔の生活であつたのである。而して眞の佛教は此の解脱後の釋尊自身の體驗の外にないではないか。

三、寺の意味

ほんとうの寺は死人を祭るべき所でもなく、又俗僧や其の家族を徒衣徒食せしむる爲めの所でもない。寺は能化の人の道を説く所、所化の人々の同く道を聽く所、更に約言すれば一切衆生の專修の道場であらねばならぬ。所謂佛道を修すべきの所である。故に今日の寺にして此の要求に應せぬならば寺は名のみにして其の實は寺ではないと云ふことになる。

四、本當の僧

僧とは和合の儀であるが、ほんとうの僧とは、如來として道を求むるの道士を云ふのである。僧の居住を寺と云ふ。僧の心には必ず道心が無ければならぬ。従て道心のない僧侶は眞の僧ではないこととなる。たゞ單に僧服をまとうてゐるのが僧ではない。道心なき所そこには一人の僧もないのである。

憶念の記

佐藤忠義

○死より強いものは菩提心、菩提心の象徴は稱名念佛。

○眞生は光明なり、光明は恩寵なり、眞なり美なり、善なり、絶大なる恩寵のもとに自己の全分が自由に眞善美を發揮するなり、此處に自己を中心とせる一切共生の理想郷は現はる。

○阿彌陀經ぞ、うれしき、經に曰く「七寶地あり（念佛七覺支）八切徳水（八聖道分）その中に充滿せり、池の中に蓮華（眞人）あり、青色には青光あり、黄色には黄光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり」と各自の個性に應じ眞生を自由に發揮するを意味せずや。

○王陽明曰く、個々の人心、孔子ありと、實に人間ごとごとく天賦の佛性あり、之を自覺し之を

發揮するところ凡夫よく聖者るべし、凡夫成佛の唯一易行は、念佛三昧なり。

○人多くは黄金を死藏し、瓦礫を以て砂上に化城を築かむと努力す、何ぞ本來の黄金を以て不壞の巖盤に久遠の樂園を築かむと努力せざる。

○眞生なき人生は無意義の人生なり、無明は悪なり、己れ死するところ一切を殺し居れり、光明は善なり眞生するところ一切を生し居れり。

○まづ自覺せよ自ら他を覺らむ、自己を發見せよ自ら他を發見せむ。

○汝愚物よ、汝懶惰漢よ、口達者の生意氣者よ、何事を爲すを得むや、咄！惡魔、我れ至心に精進して、我れよく我れに克たむ。南無

「人至心ありて精進に道を求めて止まずば會す當に剋果すべし、いづれの願か得ざらむ。」

○眞に生むとする心は菩提心なり、この心は法悦なり歡喜なり力なり、日に新、日々に新に改むる創造的進化の白道に無限の法悦の澎氣充ち滿

てり。

○ほんとに力強い日々の生活よ幸福なる人生よ。

雲の斷間の蒼空に

翼張り切り翹り行く

鷺の姿の雄々しけれ

何處より來りしか知らねども

何處へゆくか知らねども

天翹り行く大鷺の

雄々しき姿ぞうれしけれ。

○永遠に向上せむとする我を抱きて、宇宙は常恒不斷に無限より無限に至りて進展して止まず。

○無量無邊なる宇宙中心何處にありや、我が爲めには、我れ一心に敬禮し拜るとき我れを中心にして全宇宙ありと感ず、是れ真か、是れ真か、あゝ其が莊嚴さ言語に絶えたり、我が胸せまり泪あふる。

○人生に失敗なし、干潮の極は満潮にうつる時よ過去の我が失敗も、げに今日の勝利の芽なりけり。人生の辛酸と虚偽を味いし者には眞生の味

即眞生たるなり。

佛は正覺なり、正覺の教（宇宙の絶対眞理を體現した教）が佛教なり。

○迷信的念佛を外道三昧と云ふ、外道念佛も入信の初歩にして、いつしかに如來上々眞生念佛三昧に到達すべし、實に如何なる念佛と謂も至心に信樂すれば向上せざることなし、此れ念佛は絶対眞理の教なればなり。

○自己を改造し眞理を體得せんとせば至心に念佛三昧を行するにあり。

○釋迦牟尼佛滅後二千五百年我れ其面影を追慕すれば法輪轉せられて今我が衷に轉來せるに驚く時間空間を超絶して我れ今や靈鷲の會座に在るなり。

○我れ驚異に歡喜す。現代人類最高思想が期せずして「眞生」の名のもとに現れ各種の宗教哲學其他の形態をなして一大潮流となり奔流せむとするを。我れ一泡沫に過ぎずともこの潮流に流

更に深し。

○身も心も捧げ奉ると云ふも如來はよろこび給はず身も心も捧げ切つて如來を愛慕する心を受け給ふなり。

○人類の進化は驚異に初まれり、我が信も亦驚異に出發せり、常に宇宙に驚き、神祕に驚く、驚くごとに我れは向上せるが如し、常に邪心なき驚異の瞳を見張りて、我れ永遠に向上せむ。

○心は想像を生み想像は體驗によりて形成す、電氣を智解し得ざる時代の人間は空中電氣を以て雷神なりと想像し、體驗の範圍内に於て角を生やし太鼓を持てる鬼人の形體を以て其の正體なりと成しにき、是れ誤れる知覺に基けるが故なり、正しき知覺によりて電氣を發見し、是を利用するに到りて今日の文化を來せり。

○誤れる知覺による無明の宗教は前者の如く雷神に似たる神をつくるのみ、信仰を體現し人類文化の根源となすを得ず、これ迷信なり、後者の如く正しき知覺による光明の宗教は信仰即人格

れたり。あゝ、「眞生」の潮よ、全人類の衷に満潮せよ。南無（二五、三、二五）

旅行日記

- 五月二日より四日まで越後相崎極樂寺。
- 同 五日越前永平詣寺で。
- 同 六日夜及及七、八日無鶴見樹寺。
- 同 九日兵庫縣尼ヶ崎在青年團。
- 同 十日夜同圓平寺。
- 同 十一日夜大阪市地獄庵。
- 同 二、三、四日同東平野町五貞松院。
- 同 十五日神戸 晝 藤村氏邸。 夜 極樂寺。
- 同 十六日 午前 大阪天王寺區月江寺。 夜 南錦屋町豐田氏邸。
- 同 十七日兼天王寺區大寶寺。
- 同 十八、九日法然上人誕生地參拜。
- 同 廿、廿一日名古屋崇徳寺。
- 同 廿二より五日間愛知縣黑宮氏邸 味會。
- 同 廿七、八、九日岐阜本誓寺。
- 同 三十日夜饒津町心光寺。
- 同 三十一日清水漆寶相寺。

王様

その子供

眞野志岐雄作

椰子の葉が砂上に陰影を投げる南の熱い國に、或る王様が住んでゐました。

王様は廣い領地を持ち、七つの大倉庫に一杯の寶石を持ち、多くの召使ひを使つて、何んの不足もない筈でしたが。

人間である王様には、やはり悲しいことが二つありました。一つは奥方が亡いことでした。而し、これは今はなんにも仕様のないことでした。最一つは、たつた一人切りの男の子を幼少の時分に失つたことでした。

その時分——。

その時分王様は未だ哀れな身分で、諸國を彷徨つ

てゐました。

或る夜、賑かな町を歩いてゐると、傍を歩いてゐた筈の男の子がゐなくなつて終つてゐました。わんぱくな男の子は王様の命令に反むいて、自分ひとりで或る見世物小屋の前に見惚れてゐたのです。

奥方と王様とは狂氣した様に町を探し廻りましたが、どうも知ることは出来ませんでした。

疲れ切つた二人は寺院の軒下に抱き合つて涙ぐみました。彼の男の子は何うしたらうか。哀れな彼の子は悪くい木兎に誘はされたのか。それとも幻怪な夢を見せる魔法使ひの笛口に入れられて行つて終つたのか。

そして、毎日、離れ小島の中から自分たちの行くのを待つてゐるのではなからうか。

そしてその塔の上には怖ろしい鷹が瓜を立て、番をしてゐる——。

二人の心は様々に亂れました。

町は明るく賑かでした。

が、星は二人の悲しみを慰める様に、またたいてゐ

ました。

『お星様。哀れな坊やお守り下さ。』
母は泣いてゐました。

『今に必つと探すことが出来るから、泣かなくて
もゐよ。』
父は慰めました。

ほんとに。

男の子は何處に行つて終つたのでせう。王様は豪
くなつてから、四方に家來をつかはして探させま
した。

大蛇のゐる山の奥や、とび魚のゐる海の涯も。

而し何處へ行つて終つたのでせう、それとも死んで終つたのでせうか、可愛いひとりぼつちの男の子の行方は知れませんでした。

奥方は悲みのあまり、重い病ひにね、終はれたのでした。

『坊や、坊やよ。』

夢にまでそう呼んで見えました。

それ位奥方には坊やが可愛かつたのです。

何處へ行くの。

私も行くから待つてお呉れ。お母さまをほつてをいて行つて終ふの。此方へお出で、奇麗なお庭へ。早くお出で。』

王様と侍醫とは心配そうに見守つてゐました。

『私も行くから、母さまも。あ、坊や、何んて美しい所でせう。桃色の雲や、青い星や、さあお母様の傍へいらつしやい。』

侍醫は静かに云ひました。

『おこときれで御座います。』

王様は冷くなつて行く奥方にすがつて、嗚咽してゐました。

奥方が亡くなつてから丁度一年たつてゐました。

王様は自分の権力や、金は何んの力にもならないことを悲しみました。

王様は腹から離れて、家來を呼びました。

『何か御用事で御座いますか。』

一番ゐらい家來です。

『あすはきさきの亡くなった日だから、この國中の民に施をしたいと思ふのだが。』

王様は云ひました。

『その川意をしておいてもらいたいのだがね。』
家來はかしまつて出て行きました。

二番目の家來を呼びました。

『あした施しの日に、わしにいた男の子供がゐたら連れて来て呉れ。』

王様は云ひました。男の子供の目の下の目黒や、その他のことをつけ加へました。

三番目の家來を呼んで、明日着る立派な衣裳を持つて来る様に命じました。

『若しかしたら、あしたは坊やに逢へるかも知れない。何うもそんな氣がしてならない。』

王様はほゝゑみました。

可愛い男の子が、何んなに賢くなつてゐるかを思つてひとりで悦びました。平常淋しい王様の顔も貴蛋白石の様に輝いてゐました。

施しのことが町に擴ると、遠い田舎からも、國の涯から涯までの民が町に押し寄せて來ました。その晩は一層町は賑かでした。

家來たちは施しの用意のために徹夜し働らいてゐ

ました。王様はだん／＼悲しくなつて行きました。赤陽は最う西に落ちかけてゐるのに、王様の求めてゐる子供は來ませんでした。中には似た様な子供もあつたのですが。

『ほんとは木兎に殺されて終つたのか。』
王様の目からは止め度もなく涙が溢れました。

乞食の群が來ました。順々に頂いてかへつて行きました。あとから二番に男の子がやつて來ました。

王様はみすばらしい男の子の顔を見てゐました。目の下には黒目がありました。

王様の子供でありました。男の子供は氣高い王様が自分を見てゐるので、急に怖しくなつてかけ出しました。

王様は家來に命じて捕へさせました。

『私は何も悪いことをしません。私を何故捕へるのですか。』

男の子は大聲に呼んでゐました。

ました。

王様は一番立派な衣裳を着てゐました。翡翠や、瑪瑙や、瑠璃や、たとへて見れば王様の姿は神様の様に輝いてゐました。

王様は夜明けに丘の上になつて町を見てゐました。

悲しみに満されてゐました。死んでいつたきさきのことを考へたからです。

而し、子供のことを思ふと、晴れ／＼とした氣分になりました。

『きさきの魂が、坊やを導いて呉れるかもし知れない。』

施しを受けるため、未明から丘の下に群衆が海の様押し寄せて來ました。

群衆は王様の氣高い姿を仰ほぐと、一様にひれ伏して、ありがた涙に暮れました。

それを優しく見る王様の王冠の上には燦然と紫色の圓光がさしてゐたのです。

施しは順番に濟んで行きました。群衆は町から田舎へ、よろこび乍らかへつて行き

家來は王様のお氣にさわつたのだと思つて、びか／＼光る劔を抜いておどしつけました。

『何んでもゐ、から王様の前に行くのだ。動かぬと斬るぞ。』

男の子はびつくりして目を廻わして終ひました。殺ろされるのだと思つたからです。

王様は家來を叱りました。『手荒なことをしてはいけない。氣付け薬をのませて、行き度い所にやつて呉れ。』

自分を忘れて終つた、愚かな男の子が悲しかつたのです。

氣のついた男の子は、王様や澤山の家來がたつてゐるのを見ると、猿の様に赤い顔をして呼び乍ら走つてゆきました。

待つてゐた乞食の群れは、男の子を連れて田舎の方へかけて行きました。

王様は家來にそのあとを密つとつけさせました。而して、自分はお城にかへつて行きました。

王様は又考へました。

家來は歸つて來て、乞食の群れの住家を申し上げ

ました。

『潮の畔りにゐました。』

『そうか。御苦勞ぢやつた。』

と王様がひ云ました。

びつくりして終つた男の子はふたたび外に出ませんでした。

汚い小屋の中にはいつて、考へてゐました。

施しをして自分をだまして殺そうとしたのだと考へました。

男の子は猿の様に口をいがめて見ました。

而してつばを吐きました。

王様はちんばとびつこの見苦しい家來を呼んで云ひました。

『湖の畔りの乞食林に行むて、男の子を連れて來て呉れ。』

二人の家來はかしまりました。

二人は乞食の着物に着替へて出掛けて行きま

した。

『おれたちと一緒に來ないかい、』とある

ねづみの様に小屋にかくれてゐた男の子は自分と

同じ様な汚い男たちを見ると安心致しました。

『そうかい。いゝことつて何んなことだい。』

男の子はたづねました。

『まあ、ちんばからついて來い。』

二人が云ひました。

男の子は安心して二人のあとからついて行きま

した。

二人はお城へはいつて行きましました。けれど、自分と同じ乞食と一緒にしたから、男の子は安心して

ゐました。

王様は限りなく喜びました。

『でかした、でかした。』

二人は澤山の御褒美を頂きました。

王様は家來に命じて立派な金の冠りと衣服を男の

子に着せようと思ひました。

男の子はびく／＼してにげ出そうと思ひました家來

たちは聲をのんで笑ひました。

立派な御料理が出ました。

りんごの皮をむいて、美しい女官が男の子に捧げ

ました。

男の子はこれを投ふり出して皮をひろつてむしや

くとたへました。

王様は悲しくなつて奥にはいつて終ひました。

王様は何うにかして男の子をかしくくしたいと考へてゐました。

男の子は毎日たいくつそうにお城の中をさよろよ

ろと歩いてゐました。

考へてゐた王様は、はたとひさを打ちました。

王様はお城の中で一番汚い處の掃除を命じまし

た。男の子は喜んでやりました。

人が嫌ふ様な汚いこゝでも喜んでやりました。

『何うも、彼んないやにびかく光つた御殿は怖

しくていけない。』

と男の子は思ひました。

そのうちに、男の子の仕事を手傳つて呉れる人が

出來ました。

その人は必度男の子の傍についてゐました。

男の子と共に川の畔りや、樹の下にも寝ました。

それは王様でした。

王様であり乍ら、乞食でさへさらふ様な汚い仕事

をしたのでした。

それ位男の子が可愛かつたのです。

而し着物が變つてゐるので、男の子はそれが王様

だとは知りませんでした。

王様はそうしていろ／＼教へて行きましました。

地球の丸いことや、人間が地球の上に住む生物の

中で一番かしこいことや、これ等の人間は宇宙

の大神の慈みの中に生をいゝなんてゐることや

白痴でなかつた男の子はだん／＼賢くなつて行き

ました。

王様はだん／＼上品な仕事をさせ、美しい着物を

與へて、根氣よく王子を仕立て、行きましました。

『小父さんは何うしてこんなに親切にして呉れる

の。』

ちひさい時から、醜い人間の間を歩るいて來た男

の子は、やさしい心になつてたづねました。王様

は泪をためて黙つてゐました。

さあ。その翌日から王様は男の子と働らきません

でした。

男の子は毎日寂びしさうに丘に立つてゐました。

『小父さんもやつぱり俺を捨て、行つて終たのか

男の子の眼からは涙がぼろ／＼と落ちました。涙は砂に吸はれてゆく。

それから半月程が流星の様に流れて行きました。男の子は、今度は立派な官人に連れられて、御殿に行きました。

「涅槃の間」の黄金の寝台の上に紺夜具を被て王様が寝てゐました。

『小父さん。』

男の子は生れて始めてのなつかしい心持で王様にすがりました。

涙が溢れました。王様の眼からも涙が溢れました。

男の子は乞食の群の中で、ひねくれて育つて来たけれど、王様の深い慈悲によつて、無明からさめたのです。

『お前はわしの子だったのだ。』

王様は云ひました。

『お父さん。』

『そうだ。そうだ。わしはお父さんだ。』

王様はうれしさうに云ひました。

『わしは成う生きては居れない。わしの教へたことを守つて、宇宙の法則に反ひてはならない。』王様はなれない仕事のために、病ひにかゝつて終つたのでした。

王様はそれ位らしい男の子が可愛かつたのです。そのかわり男の子は賢良な王子になつてゐたのです。

せめてもそれが王様の喜びでした。

王様の魂はお城を離れて、天國にゆら／＼とのぼつてゆきました。

かしこい王子はお城の裏の丘卓に莊麗な墓碑を立てました。

そして白薔薇の花をたてました。

ばら色の旗を押し立てた王子の軍は悪い敵たちとの何十度の戦ひにも一度も負けませんでした。

而して、世界にその名が轟ろいて行つたと云ひます。

(一九二五、六、二〇作)

蛇足。法華長者窮迫の語から構想を得たものです。王様の慈悲は宇宙のみをやの大慈悲であり、凡べて佛から出た人間でありながら、無明にとざされてゐるのが王子の姿であり、すがめどびつこは聲聞緣覺で、後の官人が菩薩なのです。

吾朋便り

□永平寺にて 土屋観道

只今私は越前の山奥永平寺の宿所に居ります。昨夕越後の柏崎から道友神谷善之進氏と共に着いたのです。之は私の永年の宿望の一つでありました。曹洞宗の開祖道元が此の地に一宗を開宣せられたかと思へば私の心には限りない往昔のなつかしさに堪ぬぬものがあります。見るもの聞くもの皆一禪僧の高潔な氣分が私の心に更に一層に香るのを禁ずることができませんでした。殊にき届昨夜の浴場の中の静寂さ並に寺院塙内の掃除の行いた所何ともいへぬ氣味でありました。それに夜間勤行の莊嚴さむしろ靈感をさへ感ずるものがありました。何といふ行き届いた勤行の仕振りぞ、讀經の聲、及び其の謹直の姿鳴る鐘の響きに至るまでかくばかり莊嚴の儀式ありやと思はせました。而も其の讀經たるや私が大學時代にしきりに愛讀した正法眼藏行持の卷であつたのです。私は

かねてから禪が好きでありました。

殊に今から二十年許りも前に工業學校時代九州博多の聖福寺の禪師を慕つたことがあるのですがそれ以來私の心には何とはなしに、其の禪僧の氣前を愛すやうになつてゐた、それが佛門に歸してからは是の正法眼藏を拜讀して、成佛の自覺を充分に味はせられるの身となつた。それが今かうして眼のあたり莊嚴の内に如來の御前に讀經せられてゐるのである。私の心が今更のやうに喜ぶのも無理からぬことでありませう。集まる禪僧百名ばかり、參詣の信者は三百餘、皆一人として謹嚴の心に打たれぬ人とはなかつたやうです。

私は考へた、之でこそ佛教である、道元の人となり又此の氣分の中に味はれる、さすがに道元は偉人であつた、彼の學説は決して單なる學説でない。かうした修道の眞劍こそ、即ち道元の心である。之に比べて多くの佛教は何を一體してゐるのであらうかと私の心に浮ぶものは道友の姿であつた。果して幾人かこの修道の心に比べて辱ぢない所の人であらうかと、さうして私の心には之ではいかぬ、之はやつぱり私が悪いのだ、私の傳道が

ふまじめの爲めではないか、道友の革正は先づ自分から初めねばならぬと考へられてなりませんでした。

友よ、私は今斯して私自身の至らなかつたことを悔いてゐます。人と生れ又と歸らぬこの尊い人生を私たちは一體どうして毎日過ごしてゐることでせう。たい單に一種の享樂氣分に過ごし、或は朝から晩まで私利と私欲の生活にふける。かうして一生を暮すのが決して私共の本心の願ひではありませんまい。

今少しく眞劍に、否少くとも私自身の今後の生活は之より更に一大革命の時期の來たらねばならないのを私は感じて止みません。私は何故かかうした眞劍な氣分が好きです。眞の佛も亦此の心であらせらるゝ氣がします。

かく云へばとて私は今日初めてこのことを此の勤行を見て感じ入つたものではないのです。それはいつも求めて止まぬ私の日頃の念願であるのであります。乍然今日のこの永平寺を觀るにつけて、一層今日の光明主義、否比較的眞劍であると自らに許す私共の眞生主義でさへ、更に一步の革

新の必要を感じて止まぬものがあります。とはいへ、是等禪僧の道士等が果して幾人か眞に道元の心に叶ふものでせう。私は其の點に至つてはいまだ、心から悉く感服しきれないものが多くあるのです。乍然それらは後日にゆづることにして擱筆します。

定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二五八番 眞生社

編輯兼 土屋 觀道
發行人

發行所 眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番

印刷人 三井 清次
東京市芝區三田四國町二番地三號

印刷所 精進堂印刷所
東京市芝區三田四國町二番地三號

大正十四年八月十三日

大正十五年五月十一日印刷納本

（毎月一回十二日發行）

第五卷第五